

第46回日本カトリック映画賞 授賞式

日時：2022年5月21日 13:00～14:00 場所:カトリック浅草教会

司会：井手口満（SIGNIS JAPAN 副会長）

司会 ただいまより第46回日本カトリック映画賞の授賞式を始めます。今回は和島香太郎監督の「梅切らぬバカ」が選ばれました。では、SIGNIS会長の土屋至からの挨拶です。



梅切らぬバカ

土屋 本日はこの、日本カトリック映画賞の授賞式にお越しいただきありがとうございます。本来なら上映会と一緒にやっているんですけども、残念ながらコロナ禍のために今年の上映会を開催することができませんでした。カトリック映画賞ということで、毎年楽しみにしている方がたくさんいらっしゃいまして、こういう形で行うことは申し訳ないような感じがあります。この会議の前に、今年のアカデミー賞を受賞した「ドライブマイカー」がなぜ候補に上がらなかったのかということをお聞きしてみました。

そうしたら、「あれは上映時間が長すぎて上映ができないんだ」という理由と共に、メジャーになりそうな映画は、私たちはあまり選んでこなかったなという気がしました。

そういえば過去、「おくり人」が日本アカデミー賞の受賞作となりまして、私たちも「おくり人」をカトリック映画賞に選んでいたんですけども、あれがずっとヒットしまして、結局上映会ができませんでした。あれが苦い思い出になっていることも原因かもしれません。

そうではなく、私たちはメジャーになりそうにない、埋もれている映画をもっと多くの人に観てもらいたいという感じで、カトリック映画賞を定めていますし、監督にこれからもいい映画を作ってくださいという激励の意味をこめて、この映画賞を定めています。今日は監督ありがとうございました。

司会 続きまして、SIGNIS 顧問司祭・晴佐久昌英より授賞の理由をお願いします。

晴佐久 ご紹介いただきました。晴佐久昌英です。会長は今、埋もれた映画といいましたが、十分メジャーな映画、大ヒットしたといえると思います。

我々にとってこの映画は、ある意味、救いでした。その理由は、コロナになって、エンタメ界はもちろん、我々の仕事は、不要不急だろうかという疑問が、チャレンジを受けたという教会が多かったと思います。映画界もそうだったでしょう。不要不急であるのか。このコロナの時代に、映画には何の意味があるのか、映画を作ることによってどんな価値があるのか、さらには、映画を選ぶこと、そして賞を差し上げることに、果たしてどういう意味があるのだろうか。この2年以上のコロナの、パンデミックの、ある種の大き

な危機の中であって、私たちは改めて問われてきました。実際にみんなで話し合いました。どういう映画が今必要とされているのか、あるいは、この時代にどのような映画が意味を持つのか、いろいろ迷っていたときに、この映画に出会って、とても励まされた気がいたしました。

というのは、一言で言って、忠さんと珠子さんと出会えたからです。実際には作中の人たちですが、それは永遠の友達とでも呼ぶべき2人でしたし、監督ありがとうございます、出会わせてくれてという気持ちです。監督がいなかったら、そうか生涯、忠さんにも珠子さんにも出会えなかったと思うと、それは本当に大きな出会いでしたし、励ましでしたし、そしてハタと気がつかされます。映画は人と人を結ぶと。

今戦争なんかも起こっていて、私たちは本当にバラバラになって、信じられなくて、いったいこれから世界はどうやって生きていったらいいんだろうとみんなが立ち尽くしているときに、やっぱりこの世界は、人と人が出会って、信頼し合って、助け合って共に生きていくしかない。しかも気に入った人、身近な人だけではなく、誰とでも友達になっていくような、そんな世界を一步一步みんなが作っていくしかない。それはみんなが本当に肌で感じていること。そんな時に本当だったら思わず敬遠したいような、そんな相手であっても、次第に慣れ親しんで、フッと友達だと思えるような瞬間、それが世界を実は救っていくはずだし、その瞬間をもたらすことが我々にとっても希望だし、それでいうんだったら、映画すごいじゃないか。映画の力は、それこそワクチンとか、薬にはかなわないかもしれないという言い方をよくされますけれども、もしかすると、ワクチンとか薬以上に、世界全体の免疫を上げるというか、人と人の繋がりの中での、愛という抗体を我々の中に深めていく、そういう力を持っているんじゃないか。ワクチンとか薬も大事だけれども、支援金や食糧支援も大事だけれども、一番大事なのは愛を広めていくこと。そのために映画ほど美しい媒体はないとこの映画を通してそんな励ましを受けた気持ちになりました。

その意味でこのカトリック映画賞を「梅切らぬバカ」に差し上げることができるのは、私たちにとっても大きな喜びですし、迷っていた私たちを救ってくれた作品であるとそう思っております。以上が「梅切らぬバカ」に私たちが真心から差し上げる理由です。監督本当にありがとうございます。

拍手

司会 続きまして、賞状の授与に映ります。監督前の方をお願いいたします。

土屋 表彰状。第46回日本カトリック映画賞。和島香太郎殿。あなたが監督した映画「梅切らぬバカ」は、多様な人々がお互いに受け入れ合いながら、共に生きる喜びを描いた大変優れた映画です。誰も一人では生きていけないにもかかわらず、恐れと不寛容によって孤立している私たちに緩やかに助け合う共同体の可能性を予感させ、新しい希望を示したことは称賛に値



します。珠子さんと忠さんという胸がキュンとする程、ステキな友達を持てたことへの感謝も込めて、ここに日本カトリック映画賞を贈呈します。2022年5月21日、SIGNIS JAPAN、カトリックメディア協議会、会長、土屋至。

和島 ありがとうございます。

拍手

司会 続きまして、トロフィーを贈呈いたします。

土屋 おめでとうございます。

和島 ありがとうございます。

拍手

司会 続いて、花束の贈呈に移ります。

和島 ありがとうございます。

拍手

司会 それでは監督より一言お願いいたします。

和島 このたびはカトリック映画賞ありがとうございます。そして今日はお集まりいただきまして、ありがとうございます。

私はこの映画を監督することで、約7年ぶりぐらいに映画を撮りました。それは自分がこの映画を撮る前に関わっていたドキュメンタリー映画の中で描けなかった問題を劇映画だから描けるのではないかと、この脚本を書きました。自分は脚本を書いてこれから撮影をするというときに、世の中がコロナ禍に突入しまして、映画の撮影ができるのかできないのかというところで、いろいろな話し合いをしたのですが、たくさんの人の支えの中で、映画を撮ることができました。

コロナの影響で人と人がなかなか会うことができない中で、自分はこの映画を撮るという目的の中で、キャストやスタッフや宣伝の方であったり、今こうして映画を評価してくださる方々、お客様に出会うことができたという思い、この映画自体にも感謝していますし、こうしてお礼の言葉を伝えさせていただける機会を与えてくださったことにとても感謝しています。

先ほど、晴佐久神父の言葉に友達という言葉が出てきたんですけども、先ほどお話



した、関わっていたドキュメンタリー映画の中で、ある自閉症の方と交流していました。その方が主人公のドキュメンタリー映画ですけれども、彼は最終的にスタッフを友達として受け入れた、「友達だよね」といって受け入れてくれたときのことをふと思い出しました。撮る、撮られるという関係を超えて、友達という言葉でつながったときの暖かい気持ちを今、思い出しました。そういうふうはこの映画を観て、友達という言葉で、友達って大切だよねというように思ってくださいということに、今本当に素直にうれしく思っています。言葉に詰まってしまいましたが、今日は本当にありがとうございました。

拍手

司会 ではここで一端授賞式を終わり鯛と思います。